様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２６４５

研究課題名（和文）自然言語における名詞の分解－名詞の最小構成単位と類別システムとその普遍性の解明－

研究課題名（英文）Decomposition of Nouns: Atoms and Classifiers

研究代表者
平岩　健（Hiraiwa, Ken）

明治学院大学・文学部・教授

研究者番号：１０５７２７３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、自然言語における(代)名詞の分解解析に基づき、名詞を構成する最小単位を担う機能範疇と素性を解明、その統語メカニズムを明らかにした。特に名詞の下層構造を形成していると考えられる3つの類別システム：名詞クラスシステム（Noun Class System)、性システム（Gender System)、類別詞システム（Classifier System）がそれぞれどのような統語構造を形成しているのかを新たに明らかにした。さらにGur諸語と沖縄語那覇方言の綿密なフィールドワーク調査と日英語との比較対照研究に基づき、UGに内在する3システムを統合する普遍的システムの仕組みを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題は、名詞の内部構造を分解解析することにより、日本語と沖縄語那覇方言とGur諸語・Bantu諸語の（代）名詞が共通の統語構造を有していることを初めて明らかにした点で、理論研究に対する学術的意義が高い。また、一方で、これらの言語における不定代名詞表現の研究を通して、自然言語が不定語から不定代名詞を形成する方法は限られた種類しか存在しないことや、否定極性表現に関する従来の記述的一般化に修正が必要であることが明らかになるなど、記述的観点からも学術的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：This project elucidated atomic functional categories and features that compose nouns and their syntactic mechanism, based on a decompositional analysis of nouns. In particular, I clarified the syntax of the three subsystems—noun class system, gender system, and classifier system— and the way in which they co-exist. Furthermore, I uncovered how they are unified in UG, building on my own fieldwork studies on Gur languages and Naha Okinawan.

研究分野：理論言語学

キーワード：名詞　代名詞　名詞分解　不定語　文法数　数詞　類別詞　琉球語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景：数学や物理学が数や物質の最小単位の追究と解明を目標とするのと同様に、自然言語における最小演算単位は何かという問題は言語学の古く新しい問題である。構造主義言語学が明らかにしたように動詞や名詞は文の構成素であるが、しかし明らかに最小単位ではない。さらに近年の生成文法研究は、直感的な形態素が最小単位ではなく、様々な素性と機能範疇に分解されることを明らかにした (e.g. Kayne 2005; Bernstein 2008; Leu 2015 等の *th-ere* / *th-em* / *h-ere* / *wh-ere* といった分解解析)。それでは名詞を構成する最小単位にはどのようなものがあるのだろうか？したがって本研究課題では動詞よりも研究が遅れている名詞の特に下層構造の解明を研究目的とした。名詞の内部の上層構造（DP / CaseP / QP / AgrP 等）は 1990 年代後半以降だいぶ明らかになってきた (Bernstein 2001; Longobardi 2001; Borer 2005ab; 2013; Watanabe 2006)。しかし、#P を除いては名詞の下層機能範疇の理論的研究はあまり進んでいないのが現状であった。以上から本研究課題は、DP 構造の下層構造を成し、名詞を類別する機能と名詞を名詞として働かせる機能を持つ、3 つのシステム：名詞クラス (noun class system)、性 (gender/animacy system)、そして類別詞 (classifier system) の統語メカニズムの解明を目指した。これにより名詞を構成する最小単位の種類とその構造を明らかにし、従来別々の言語に見られる別々の現象であると考えられることが多かったこれら 3 システムを統合する普遍メカニズムを解明することを目指した (Aikhenvald 2000; Senft 2000; Kihm 2005)。

２．研究の目的：まずこれら 3 システムが一体どのような機能範疇を成し、どのような素性 (features) に分解されるのかはっきりとした理解が進んでいない現状を鑑み、それぞれの詳細な記述的研究を行うことを目的とした。そして記述的研究成果に基づき、自然言語の UG に内在する 3 システムを統合するメカニズムを解明を目指した。

名詞クラスシステム：Bantu 諸語等に見られる名詞クラスシステムは主に音韻形態論的観点から考察されることが多かったが、Demuth (2000)や Contini-Morava (2002) 等が示唆しているように、各クラスはある程度の意味的カテゴリーを形成している。またほとんどの場合、アフリカ系言語の記述的研究にとどまり統語的側面の理論研究は進んでいない。しかし、研究代表者の近年の研究で、日本語においても不定代名詞システムにまさに名詞クラスシステムと極めて類似した意味分類メカニズムが潜んでいる可能性が示唆された（不定代名詞は遠近不定要素（コソアド）と物 (*-re*) 、場所 (*-ko*)、方向 (*-ti*)等の名詞クラス要素に分解される）。またいわゆる augment 母音と呼ばれる要素は各名詞クラスの語頭の位置を占め、名詞が項として現れる時は必須であり、呼格の場合等は生じないという興味深い特徴を示す。このことは名詞クラスそのものがさらに分解可能であることを示す一方で、その機能は未だ未知の部分が多い。

性システム： Hale (1976) や Silverstein (1976) 等の Animacy Hierarchy に代表される性システムは様々な言語で見られるが、その表れは多種多様で複雑である。沖縄語那覇方言では有生を表す名詞の多くは語尾の母音が長音化される（e.g. 太良 /tara/ → /tara-a/）。また主語や所有者を表す格助詞（ガ・ヌ・無標示）はその名詞の有生・無生によって形態が変わるが、その条件等の詳細は非常に複雑であり解明されていない。また Gur 諸語の一つである Buli では人間を表す名詞を構成する *a-*という接頭辞が存在する。このことから、沖縄語那覇方言や Gur 諸語は名詞の有生・無生を示すシステムが存在すると考えられる。さらに興味深いのは、この沖縄語那覇方言に見られる有生名詞の母音長音化は呼格では現れない点である。項か否かや有生・無生と相関関係がある点において、前述した Bantu 諸語に見られる augment 母音と偶然の一致とは考えられない類似性を示すことは注目に値する。

類別詞システム： 日本語を含め東アジア系の言語に多く見られる類別詞システムは 3 システムの中で最も研究が進んでいると言っても過言ではないが、一方で、類別詞を持つ言語と持たない言語のパラメータ変異は何かという重大な問題が存在する。研究代表者の予備的研究では日本語の数詞＋類別詞構造の分解解析により、類別詞が名詞クラス要素と極めて似た構造と分布を持つ可能性を示唆した。もしこれが正しければ、類別詞システムと名詞クラスシステムをつなぐ重要な手掛かりとなる。また、他に名詞を構成する重要な要素とされているのが文法数 (grammatical number)（単数・双数・複数）である。

研究課題 1：「3 つの名詞類別システムの記述的研究と分析」：以上からまず 3 システムの記述的研究と分析を目指す。(1) 名詞クラスシステムはどのような統語構造を持っているのだろうか？特に Gur 諸語に見られる名詞クラスシステムと Bantu 諸語に見られる名詞クラスシステム、そして augment 母音 (Baker 2003; Buel 2005; Taraldsen 2008; Halpert 2012) のシンタクスを考察した。Gur 諸語では名詞クラスシステムは縮小単純化されているが、比較対照により名詞クラスシステムの普遍性とパラメータを解明することを目的とした。(2) 沖縄語那覇方言に見られる有生・無生システムはどのようなメカニズムなのだろうか？格標示（ガ・ヌ・無標示）の使い分けは有生・無生が大きく関与しているのは確かだが、その詳細は極めて複雑で謎に包まれたままであった。また有生名詞が語末の母音が長音化され、無生名詞のほとんどではそれが起こらないこの現象は記述的にも理論的にも研究がない。(3) 日本語や中国語等に見られ明確な名詞分類要素として機能する類別詞システムは、どのような統語構造を持ちどのようなパラメータ変異を示

すのか？これら 3 システムの研究を進めながら名詞の分解解析を試み、その最小単位を明らかにした。

研究課題 2 :「統合システムと普遍メカニズムの解明 : これまで 3 システムは表層的な類似点・相違点のみが論じられ、統語的な共通メカニズムが提案されることはなかった。研究代表者の予備的研究で明らかにしたように、日本語の不定代名詞は分解することで代名詞根と名詞クラスに類する要素から構成されていることが見えてくることから、日本語にも名詞クラスシステムが存在している可能性が高い。ここで注目すべき点は、Gur 諸語／Bantu 諸語と比較して名詞クラスのシステムが普通名詞一般には波及していない一方で、日本語・沖縄語や東アジア圏の言語の多くは普通名詞一般に類別詞を広く発達させているという点である。両システムが完全に別のシステムであればこのような相補分布は見せないと予測される。また Romance/Germanic 諸語に見られる性システムと名詞クラスシステムとの類似性は様々な研究者が指摘しているところであり、沖縄語那覇方言との比較対照により 3 システムの普遍メカニズムの解明を目指す。

３. 研究の方法：本研究課題は (1) 名詞クラスシステム（Gur 諸語／Bantu 諸語と日本語・沖縄語那覇方言）、(2) 性システム（沖縄語那覇方言、Romance 系言語）、(3) 類別詞システム（日本語・沖縄語那覇方言）、(4) 3 システムに共通する統合的統語メカニズムの理論的解明、の 4 フェーズからなり、それぞれフィールドワーク調査研究で得られた一次的データに基づき理論的研究を遂行した。サバティカル期間に該当した 1 年目はフルブライト研究員としてマサチューセッツ工科大学 (MIT)において名詞クラスシステムを集中的に研究した。2 年目は沖縄語那覇方言に見られる有生・無生システムの解明と他言語の性システムとの比較対照研究を行った。3 年目は 1-2 年目の研究成果に基づき類別詞システムとの共通点及び相違点を明らかにした。最終年度には 3 システムに共通する統語メカニズムを解明した。

４. 研究成果：以下、本研究課題から生まれた主な研究成果を言語グループごとに記述する。

まず、Gur 諸語の一次的データに基づく研究により、（代）名詞構造は D / Dem / # /noun class / N という階層構造を成していることを明らかにした。この研究の一部は 5 つの Gur 諸語の話者である 5 名の言語学者と共に国際学術誌 *Glossa* に共著論文として出版された (Hiraiwa et al. 2017)。尚、この研究に基づいた主要部内在型関係節の論考も *Wiley-Blackwell Companion to Syntax*（第二版）に出版された (Hiraiwa 2017c)。また、ガーナ大学教授の George Akanlig-Pare 氏との共同研究により、否定極性表現等の不定代名詞の内部構造を明らかにする一方で、Vallduvi (1994)以来影響力のある従来の否定極性表現の分類法が正しくないことを示す証拠を示した。この論文は ACAL 49 の proceedings に出版が決定している (Akanlig-Pare and Hiraiwa to appear)。さらに、トーゴ大学教授の Komlan Essizewa 氏との共同研究により、Kabiye 語の名詞クラスシステムと否定極性表現の記述を行い、内部構造を明らかにした。以上の研究結果から、Gur 諸語／Bantu 諸語の名詞クラス要素は nc という下位機能範疇であるとの結論が得られた。

次に、沖縄語那覇方言のフィールドワーク調査では、主に否定極性表現と存在量化表現の研究を行った。沖縄語那覇方言の否定極性表現は日本語とは異なり、否定一致表現と（弱い）否定極性表現の両方の性質を兼ね備えていることを明らかにした。本研究内容は MIT で開催された WAFL14 の proceedings に出版された (Hiraiwa 2019b)。また、沖縄語那覇方言の存在量化表現は、一見したところそれ以上分解ができない名詞句のように見えるが、内部構造は疑問係り結びからなる文構造を持ち、削除と音韻変化が適用されることによって現在見られる形 (e.g. *taa-gana*) が派生されていることを示した。この研究は Proceedings of LSA Vol. 5 に出版された (Hiraiwa 2020)。尚、フィールドワーク調査では、沖縄語那覇方言では、有生名詞と無生名詞が示す主格・属格の形態の違いに加え、確かに有生名詞の語尾母音が長母音化する傾向が見られた。このことは名詞の内部構造に有生／無生を決定する機能範疇が存在していること、またそれが代名詞における名詞クラス要素に相当することを示唆するが、例外も多くあり詳細の解明は今後の課題である。

数詞および文法数に関しては、まずヒトの言語における数を表す名詞（数詞）の構造の研究を行った。数詞は非常に多くの自然言語において等位接続による加算構造を持つことを示し、それらは通常考えられているような原始回帰関数 (successor function) のような構造を直接表示するものではなく、他の動物に共通する二つの数認知システムを併合操作により統合したシステムとなっていることを明らかにした。この研究は国際学術誌 *Frontiers in Psychology* に出版された (Hiraiwa 2017a)。また、日本語は長年にわたり文法数の区別がない言語とされてきたが、疑問詞を除く不定語が単数の文法数指定を持っていることを明らかにし、Proceedings of LSA Vol.4 に出版された (Hiraiwa 2019a)。さらに、日本語の類別詞と不定語の組み合わせに関して、数を表す不定語は nan という独自の要素であること、またこの不定語は非顕在的要素である NUMBER と結びつき一つの構成素を成していることを主張した。この研究は *Snippets* に出版された (Hiraiwa 2018b)。

日本語に関しては、日本語の名詞クラスシステムが不定語システムに限り観察されることから、不定語から不定代名詞が生成される統語・形態プロセスの詳細な研究を行った。この研究では日本語の不定代名詞がすべて不定語の根要素 (*da*, *nani*, *do* 等) と名詞クラスを表す要素 (*-re*, *-ko*, *-ti*) 、及び Q 要素 (*mo*, *ka*) から成り立っていることを明らかにした。これら不定語の根要素

のうち、nani は名詞クラスを表す要素を伴わない点で他とは一線を画すが、*nani* に名詞的用法が欠落していることは決して偶然ではなく、ラベル付け理論により原理的説明が与えられることを明らかにした。この研究は Proceedings of NELS47 に出版された (Hiraiwa 2017b)。また、日本語の代名詞－名詞構文と形容詞の統語構造に関する論考が国際学術誌 *Glossa* に出版された (Hiraiwa 2018a)。また疑問文と削除に関連して小林人朗氏との共同研究が国際学術誌 *Syntax* に掲載された (Hiraiwa and Kobayashi 2019)。さらに、お茶の水女子大学の中西公子氏との共同研究により、日本語の不定語が非顕在的接辞により認可され得るという新たな現象を詳細に明らかにし、従来名詞として扱われ疑念の余地がなかった日本語の存在量化表現が沖縄語那覇方言と同じく疑問節の構造を有していることを明らかにした。前者は Proceedings of WAFL 15 に出版が決定しており (Hiraiwa and Nakanishi to appear)、後者は Proceedings of LSA Vol.5 に掲載された (Hiraiwa and Nakanishi 2020)。以上の研究成果から、日本語と沖縄語那覇方言に見られる代名詞システムには Gur 諸語／Bantu 諸語に見られる名詞クラス要素と同様の機能範疇が含まれるという結論が得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　17件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 Ken Hiraiwa and Kimiko Nakanishi	４．巻 -
２．論文標題 Japanese Free Choice and Existential Indeterminates as Hidden Clauses	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proceedings of WAFL 15	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kimiko Nakanishi and Ken Hiraiwa	４．巻 -
２．論文標題 Intervention Effects and (Bare) Indeterminates	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proceedings of Japanese/Korean Linguistics 27	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 George Akanlig-Pare and Ken Hiraiwa	４．巻 -
２．論文標題 Unary/Binary-NEG Structures of NPIs and Reduplication in Buli	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proceedings of ACAL 49	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Ken Hiraiwa	４．巻 5(1)
２．論文標題 The Origin and Architecture of Existential Indeterminates in Okinawan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proceedings of LSA	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3765/plsa.v5i1.4705	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa and Kimiko Nakanishi	4．巻 5(1)
2．論文標題 Bare Indeterminates in Unconditionals	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Proceedings of LSA	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3765/plsa.v5i1.4706	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa and Yoshiaki Kobayashi	4．巻 -
2．論文標題 Countersluicing	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Syntax: A Journal of Theoretical, Experimental and Interdisciplinary Research	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/synt.12190	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa	4．巻 -
2．論文標題 Negative . . . Concord or Polarity?: NSIs in Okinawan	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of WAFL14	6．最初と最後の頁 154-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平岩健（中西公子氏との共著）	4．巻 第6章
2．論文標題 日本語の裸不定語－譲歩条件節における認可メカニズムを通して－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 極性表現の構造・意味・機能（澤田治・岸本秀樹・今仁生美（編））	6．最初と最後の頁 154-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa	4．巻 4(1)
2．論文標題 Singularity of Indeterminates: Number Distinction without Classifiers	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of LSA	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3765/plsa.v4i1.4526	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa	4．巻 3(1):132
2．論文標題 Something Visible in Japanese	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Glossa: A Journal of General Linguistics	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5334/gjgl.361	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa	4．巻 32
2．論文標題 Anatomy of what and NUMBER in Japanese	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Snippets	6．最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7358/snip-2017-032-hira	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa, George Akanlig-Pare, Samuel Atintono, Adams Bodomo, Komlan Essizewa, and Fusheini Hudu	4．巻 2910(27)
2．論文標題 A Comparative Syntax of Internally-Headed Relative Clauses in Gur	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Glossa: A Journal of General Linguistics	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5334/gjgl.40	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Ken Hiraiwa	4．巻 47(2)
2．論文標題 Labeling Roots and Pronouns	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Proceedings of NELS47	6．最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa	4．巻 4
2．論文標題 Internally-Headed Relative Clauses	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Wiley Blackwell Companion to Syntax, 2nd Edition	6．最初と最後の頁 2038-2069
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/9781118358733.wbsyncom028	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ken Hraiwa	4．巻 -
2．論文標題 On So-Called "So-Called "So-Called Pronouns""	5．発行年 2017年
3．雑誌名 A Pesky Set	6．最初と最後の頁 233-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ken Hiraiwa	4．巻 8:351
2．論文標題 The Faculty of Language Integrates the Two Core Systems of Number	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Frontiers in Psychology	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2017.00351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 平岩　健	4．巻 第7章
2．論文標題 自然言語と数詞のシンタクス	5．発行年 2016年
3．雑誌名 文法と語彙への統合的アプローチ:生成文法・認知言語学と日本語学(藤田耕司(編))	6．最初と最後の頁 89-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　5件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 Ken Hiraiwa and Kimiko Nakanishi
2．発表標題 Bare Indeterminates in Unconditionals
3．学会等名 The 94th Annual Meeting of the Linguistic Society of America（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Ken Hiraiwa
2．発表標題 The Origin and Architecture of Existential Quantifiers in Okinawan
3．学会等名 The 94th Annual Meeting of the Linguistic Society of America（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Ken Hiraiwa and Kimiko Nakanishi
2．発表標題 Bare Indeterminates in Japanese
3．学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics 15（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Kimiko Nakanishi and Ken Hiraiwa
２．発表標題 Bare Indeterminates and Intervention
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 27（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 On the Singularity of Indeterminates in Japanese: A Case of Number Distinction without Classifiers
３．学会等名 The 93rd Annual Meeting of the Linguistic Society of America（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 Negative . . . Concord or Polarity?: Rethinking the NCI/NPI Partition from Okinawan
３．学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics 14（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ken Hiraiwa and George Akanlig-Pare
２．発表標題 Pre-Negative NPLs in Buli
３．学会等名 The 49th Annual Conference on African Linguistics (ACAL 49)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 Some Consequences of the Labeling Algorithm
３．学会等名 第89回日本英文学会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 Decomposing Indeterminate Pronouns and Composing Indefinite Pronouns
３．学会等名 TEAL11（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 Syntax of Ellipsis, Pro-Form, and Haplology: Evidence from Japanese and Okinawan
３．学会等名 East Asian Linguistics Seminar, Lund University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 Indeterminate Syntax in Japanese
３．学会等名 Grammar Seminar, Lund University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 Labeling Roots and Pronouns
３．学会等名 NELS 47（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Ken Hiraiwa
２．発表標題 Decomposing Indeterminates and Composing Indefinite Pronouns
３．学会等名 NYU Syntax Brown Bag Talk（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Ken Hiraiwa	４．発行年 2016年
２．出版社 Ubiquity Press	５．総ページ数 -
３．書名 A Special Collection of Glossa: Internally-Headed Relative Clauses	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考